

【曙保育園】

●2025.1.14 ふりかえり①(先生 2 名、スタッフ 2 名)

スタッフ①:

では、早速お話をお伺いしていきたいと思います。

ラーニングストーリーを元にお話を進めさせていただきたいと思いますが、ここに書ききれなかったことや、その時に見られた子どもの主体的な姿でどんな行動が見られたのか、あと、その当日や体験後のここで過ごしている姿と遊木の森で過ごした時の姿の違い、どのように違う姿が見られたかといったことを教えていただければと思います。

先生①:

2歳児の担当です。ラーニングストーリーに挙げたエピソードなんですが、長い棒を見つけた子がいたんですよね。この子はずっとこれにこだわって持ち歩いていたのですが、ここの栗の木のところに来た時に、栗があったのか葉っぱだったのかは覚えていませんが、上のものを突っついていました。とても小さい子なのですが、すごく一生懸命やっていたんですよね。それを見た他の子やそばにいた子も、長めの棒を持って、届くわけがないのに一生懸命ジャンプしながらやろうとしていたんです。届かないし落ちてこないのですが。

他の子が真似をしてやろうとしましたが、その子は早々に諦めたんです。そうしたら、もしかしたら大人が先にやってくださったのかもしれませんが、**その棒を持って石を叩いたんですね。すると、音が出るじゃないですか。その音が鳴って「あ、鳴った」って言うと、それを聞いていた子が自分のそばにあった木を持ってきて、今度は石だけじゃなくて木も探して叩いてみたり、どんどんいろんなものを叩き始めました。「鳴るよ」「見て」「聞いて」など大人の方にも向けてくるので、一緒に聞いてみたり叩いてみたりして、「あ、この音、違う音がするね」などと言いながらしばらくそんな遊びをしていました。この子も棒を持っています。この日、この子はお母さんと離れるのがダメで、ずっと泣いていたのですが、最後の方によく泣くのをやめて、同じように棒を持ってやり始めたんです。**

なので、**「なんだろう」「面白そうだな」という興味があると、子供は本当にそこに集中していくし、夢中になって繰り返し同じことをして遊ぶ場面がすごく面白いな**と思いました。普段からも、「なんだろう」という興味はいろいろな場面であるのですが、**やっぱり自然の中は興味を持つ内容がものすごくたくさんあります**よね。今回参加してみて、こんなにたくさんあるんだということに私自身も気づきました。子ども自身もいろいろなものを、同じことだけではなくて、**他のことにも「やってみよう」とチャレンジする様子が見られた**ので、すごくいい経験をしたなと思います。

帰ってきてからも、そんなにたくさんはないのですが園庭にある落ち葉や、センダンの実が落ちる時期だったので、そのセンダンの実を拾ってみたりしていました。私も一緒に葉っぱを拾って「大きいね」「小さいね」と順番に並べていたら、子供たちも「あったよ」「これ大き

いね」「これ小さいね」などと集めてきて、私も「じゃあ、これはこっちだね」と順番に並べてみる遊びをしていました。

年長児が鉢植えを作っており、今パンジーが咲いています。ちょうど玄関を出たところに置いてあるので、毎日「あの花、パンジーっていうんだよ」「パンジーだよ」「今日のパンジー元気かな」などパンジーパンジーと言っていたら、子供たちも「パンジーが咲いているね」とみんなでパンジーを覚えました。そうすると、今度は他の花の名前も、「これはなに？」「これはなんていう名前？」と聞いてみたり、そこでまた**興味がどんどん広がっていく様子が見られました。**

さっきも先生とお話したんですけれども、まだ小さくて、子ども自身が気づくことももちろんあるのですが、**気づいたことをどれだけ拾ってあげて、それを広げていくかというのは、大人にかかっているなとすごく感じます。**あと、**大人が気づいたことをどう子どもに広げていくか**です。やっぱり子どもだけでは、興味を持つことはあるけれども、まだまだ小さな世界です。でも、そこに大人がかかわることで、子どもの興味や集中力などがどんどん広がっていくと思うので、私自身も本当にもっともっと勉強しないといけないなということをすごく感じています。

スタッフ①：ありがとうございます。

先生②：

3歳児担当です。当てはまるものの中には、「興味を持つ」「夢中になる」「チャレンジする」というところにチェックを入れさせていただきました。クラスに虫が好きな男の子がたくさんいるので、この遠足はとても楽しみにしていました。反対にお母さんたちは、虫が嫌いなお母さんが多くて、「えー、自然って言われても」「そこに行くの？」みたいな感じでした。お母さんたちは何か遊ばせる物がないと子供とかかわることができません。たとえば遊具があれば、そこで遊ぶ姿を見るといった風にかかわって遊べるのですが、何もないところで、草と葉っぱと木と虫と土という中で過ごして遊ぶことがあまりないんですよ。

だから、最初はちょっと……だったんですけれども、**行って帰ってきてからの感想の方がすごく面白いものがありました。**私もやっぱり虫は嫌いですが、子供が一生懸命虫をつついてみたり探してみたりしている姿を見れば、「**私、虫は触れないけど、子供と楽しめるな**」という**お母さんたちの方が多かった**ですよ。先生、「字が書ける葉っぱがあるんですよ。先生、知っていましたか？」「知っていました」「えー、すごい」と言われました。お母さんたちはそういうこともわからないのです。たとえば、木にキクラゲがなっていたのを見つけて、「これ、キクラゲっていうんですよ」と教えてあげたら、「え、キクラゲは海じゃないんですか？」と、キクラゲが森の中の木になっていることを知らないんですよ。そういうものを見たのが初めてだったので、**お母さんたちの方が子どもよりもすごく関心を持っていたんです。**

スタッフの方がジョロウグモを手に乗せているのを見ていた子どもが、「あ、クモがいる、

クモがいる」、「あ、ダメダメ」みたいな感じで見ていました。クモがあちこち歩いていくんですよね。そのスタッフさんが全然平気な顔をして自分の体の周りでクモを遊ばせているのを子どもたちは見ていました。園に帰ってきたらクモがいっぱいいるんですね。それをこうして子どもが手で、「触れるの?」と聞いたら、「怖くないもん」と言いました。大人がそういう生き物と接しているのを見て、お母さんも怖いと言うけれども、怖くない大人もいるんだと知り、そういうものを見て、**子どもが「あ、大丈夫」、「触っても大丈夫」と学んでくれました。**怖いものなら、大人も危ないからとか気を付けた方がいいよと言うかもしれませんが、自分の身にまよっているクモを見て、**それは危ないものではないという認識を子どもが感じたのです。**クモは悪い虫ではないというところから、クモがハエを捕まえるなどいろいろな話が出てきて、「虫もいいことをしているんだよね」、「そういう虫もいるんだよ」と話が広がっていきました。

ダンゴムシなどの虫を園庭の隅に行き探している子に「触れるの?」と聞いたら「触れるよ」と言っていたので、それならばミミズやナメクジなど、子どもが触っても安全なものなら、触れさせてあげたいなというのはすごくあります。**園の中にいる虫で、自分もわかってる虫だったら、一緒に触れていくのもいい経験です。触ったことによって、感触、においといったことが感じられるし、色もやっぱり大事だと思います。**園庭の芝生が茂ってくるとバッタが出てくるんですよね。そうすると、「緑のバッタと茶色のバッタがいる」、「これは緑のバッタ」、「これは茶色のバッタ」、「こっちは大きいからお父さんのバッタ」、「いやいや、大きいのはお母さんのバッタかもしれない」というような話をしながら、**子どもたちが自分で見つけたものを子どもたちなりに分けたり比べたりしていたんです。**そういうことが今までありませんでした。**図鑑の中だけでしか知らなかったことを、実際に手に取って見ることができて、それが楽しいということがすごく感じられました。**

帰ってきてからは、図鑑を広げて、「この時にあった葉っぱはこれだね」と持ってきた葉っぱやどんぐりを見て、「これと同じかな。違うかな」と子どもたちの中で見て、「これ赤いから違うよね」「緑だね」「これ字書けるかな」と保育園の葉っぱにも書いてみたりして楽しんでいました。あと、ぺちゃんこになった栗に目をつけていただいたんですね。そうしたら、それをとても大事にして、今でも制作したのがあって、そこにボンドで止めて動かないようにして飾ってあるのを見ているので、そんな制作にも繋げていけます。自然と遊ぶということにはそういうこともあるのかなと思います。

先ほどの話と同じなのですが、自然だけではなく、**子どもが興味や関心を持っていくというのはやっぱり環境にあると思います。**私たちが人的環境として子供たちにかかわって、自分が興味を持っていき、物的環境でこの園の中に木を植えたり花を植えたり土を掘ってあげてみたりなど、そういう環境を作ってあげるのがこういう保育にも繋がっていくのかなと思います。

このところ、お母さんたちも、子供をいろいろな公園に連れて行ってあげたり外に出たりしているという話を聞くことがあります。いろいろな形のどんぐりを拾ってきて、名前が

わからないと「先生、これなんでしょうかね？」と持ってきてくれたりします。そういうことを子どもたちと調べたりするのも楽しいし、子どもたちは園庭の隅に行って散策しています。めくってみたり、「こういうところにいるよ」と石の下を開けてみたり、植木鉢を引きずってどかしてみたり、そういうことが自然だけではなく、他の活動にも繋がっていくのかなと思っています。やっぱり自然は作られたものではなく、自分の五感に入ってくる感覚的なものが大きいというのはすごく感じています。子どもたちのいい教材というか刺激になるものなので「また行きたいね」と言っているんです。何人かの方は、たぶんあの後も遊木の森さんの方に行っていると思います。

スタッフ①:親子ですか？

先生②:はい。

スタッフ②:すごいです！

スタッフ①:ありがたいです。では、親御さんからかなりいい反応があったんですね。

先生②:そうですね。まず、「自然ってなに？」というところで、公園に行ったら土をいじっていいという感覚だったのが、虫はお母さんが嫌だから「触らないで」というようなことがあったと思うんですけども、そういうところがなくなってきました。

スタッフ①:園庭の隅を散策しているとおっしゃいましたが、それは以前にはあまり見られなかったことなんですか。

先生②:そういうのが好きな人と嫌いな人っていると思うんですけども、やっぱりこちら側が、「ねえねえ、探してみようよ」って言ってあげないと子どもたちはそれを知らないで通ってきてしまいます。誰か男の子が何かをやっていたら、そこへ大人と一緒に他の子を連れて行ってあげて興味を示していかないとなかなかなかったりします。今では女の子でもダンゴムシを探してきて、「それどうするの?」「持って帰る」「やめてやめて」、「うちの中まで上げちゃうんですよ」、「ポケットの中にしまって持って帰っちゃう」といったことがだんだん増えてきたなと思います。

スタッフ①:本当ですか？よかったです。

スタッフ②:先生は自然にお話しそうですね。

先生②: いや、小さい時から広場に行ってコオロギを探したりモグラやコウモリを捕まえたりとか、田舎というか自然が多いところにいたので、山菜などを取ってくるとかそういうの…。

スタッフ①: なるほど。すごいですね。

先生②: いやいや、山に入るのが好きなんです。

スタッフ①: では、遊木の森はもう格別な場所ですね。

先生②: ここに来るとキクラゲすごいですよ。食べられるものが、よもぎとかありますもんね。

スタッフ①: そうですね。お電話でお話させていただいた時に、以前は職員が少なくて散歩に行けていないということをお話されていました。今は忙しい時期に入ったと思いますが、年末やクリスマスは散歩には行かないで園庭で遊ぶという感じですか。

先生①: 最近は行っていますね。

スタッフ①: 本当ですか！

先生①: 場所が近くにあまりないんですよね。でも、農道のある向こうの畑の方に行くと。

先生②: ホトケノザなどいろいろな草花があるので、そういうものを子どもたちに見せています。

スタッフ①: このプログラムで職員と子どもたちの視点が変わった感じですか？

先生②: 子どもも「これなに？」と聞いてきます。「これなに？」「これなんていう名前？」「これ花？」「これススキだよ」などと言って、「それススキだったかな」と似たようなものを。でも、そういうことが子どもたちの中でわかるようになってきているから、少し関心を持ってくれたことは大きいなと思います。

スタッフ①: 園庭での遊びが広がっているような感じですか？

先生①: そうですね。それまでは先生たちも厄介な落ち葉や実という感覚が大きかったみたいですが、そこはゴミではなくなりました。

先生②:今日もダンゴムシがいます。「ダンゴムシどこにいた?」と言ったら、「あそこの下見たらいた」と子どもが言っていました。もういるところがわかっているから、どの季節に出るのがわからなくても探してみるんですよ。

先生①:2歳児なので自分の世界で遊んでいることが多いですが、やっぱり**友達がしていることに関心を持って、楽しさや面白さを共有する機会が増えていく**といいかなと思います。たぶん、もうそういう方向に行ってはいると思います。

スタッフ②:今回、2歳児さんでさせていただいたことは、たぶん他の園だと、もう少し上の子どもたちを連れていくのが普通だと思います。けれど、もう少し下の年齢から自然体験をしてもらった方がいいのではないかという研究があるようです。**言葉をたくさん喋るようになる前に、五感をどれだけ発達させると成長にいいのか**ということで、**触ってみることや匂いを嗅いでみることを自然の中で経験してもらうことの意義を感じてもらえたら**なというところだったのですが、その辺りはやっぱり普段接していらっしゃる先生から見ても感じられるところですか。

先生①:そうですね。すごく面白いなと思うことがいっぱいありました。お弁当を食べた後に、それぞれぱっと出て行って遊んだのですが、奥の方にトンネルのような、登ってちょっと行ってまた下ってというところがありましたね。あそこも何回も繰り返し繰り返し。はじめの下りが結構急だったので、お尻で滑ったりしていたのですが、この泣いていた子も「おいで」と言って手を出したら、「いい」と言って自分でやろうとしました。お尻で滑るのですが、**なんとか自分でやろう**というのがすごくあって、そういうことがすごく面白かったです。

だから、やっぱり**ああいう広い場所では、気持ちがすごく開放的になる**のかなと思います。狭い中では気持ちも少しぎゅっとなってしまうけれど、ああいう中では**「ちょっとやってみよう」という気持ちがすごく起きてくる**のかなということを子どもの姿から感じました。なので、保護者が一緒でもいいのかなと思いました。泣く子が多くて少しもったいなかったです。お母さんがそばにいと安心なので、その中でもっともっと自分を出して遊べたのかなと思いました。

スタッフ①:なるほど。

先生②:子どもたちにとっては、お母さんたちと離れてこういう自然の中に入ったことは、それはそれでいい経験だったと思います。いつもだったらお母さんたちがいて、守ってくれて、ダメが入るかもしれませんが、それはありませんでした。うちのクラスにも泣いていた子が何人かいましたが、泣きながらもついていってズルズル滑り転がっていました。「誰も助けてくれない」「自分で行くしかない」というようなところです。だから、担当者さんが「行

くよ」と声をかけてくれて、様子を見ながら行ってくれたから安心は安心でした。ゆるい子たちも一緒についていけましたし、お母さんがいたら戻ってしまったり、だっこになってしまったかなとも思います。

スタッフ①:それぞれの良さがありますね。

スタッフ②:そうですね。

一同:ありがとうございました。